



宮司ブレス 第百九十三号

彦島八幡宮 宮司ニユース

発行者 彦島八幡宮

宮司 柴田 宜夫

発行 令和四年十二月十五日

◇宮司の柴田です。 一昨日の十二月十二日の火曜日は、「新年事始(ことはじめ)の日」でありましたが、私は、自宅の神棚と祖霊舎(それいしや)の清掃を行いました。 わが家には、神棚が、二か所ございます。 三畳一間(さんじようひとま)のお部屋の、西側に神棚(正面の扉(とびら)が五つもある大型の神殿です)、東側に、先代典行宮司、先々代八十二宮司をはじめ御先祖様をおまつりする祖霊舎が鎮(しず)まります。 さらに、私の書斎(しょさい)にも神棚がございます。 書斎の神棚の清掃は、十二月五日に、本棚や机の整理整頓(せいりせいとん)にあわせて実施しました。 実は、整理と整頓とは違いました。 整理とは、使うものと不要なものを分ける作業です。 その後に、整頓をするのです。 したがって、不要なもの は不用品として処分しなければなりません。 そうしますと、余計なものがないと、気持ちよく整(ととの)うのです。 整理整頓された書斎でのデスクワークは、肅々(しゆくしゆく)と進むことが期待されます。 その成果でしようか、六か月遅れではありますが、宮司ブレス



第百九十三号の発行です。 先々月の十月に発行が叶いませんでしたので、今月二回発行しなければ、今年は、一月に一回の発行ペースを維持(いじ)できないこととなります。 それだけは、避(さ)けたいと思いますので、そのためには、今月、もう一回の発行が必須(ひつす)となります。 すつきりとした書斎でのデスクワークに、乞(こ)う御期待であります。 ◇当宮の「新年事始め」は、十二月十一日の日曜日に、「大注連縄(おおしめなわ) おろし」、さらに、煤払(すすはら)いの行事でした。 御神明(ごしんめい)も、さぞや、御満悦(ごまんえつ)の御事(おんこと)と御同慶(ごどうけい)に堪(た)えませぬ。 御奉仕(ごほうじ)くださった関係各位に心から感謝申し上げます。 ありがとうございます。

◇さて、神棚(かみだな)の由来(ゆらい)についてご存知ですか。 その起源は、伊勢の神宮の御師(おし)、伊勢の方では、おんしといいますが、大活躍した室町時代といわれています。 御師には、全国各地に、それぞれが担当する、いわゆる営業エリア(それを檀那場(だんなば)といいます)がありました。 そして、「おはらい様」と「曆(こよみ)」さらに、お土産を持参して、信者さんのお家にお配りになられたのです。 「おはらい様」とは、その最(も)上(ひいき)にされている信者さんにかわって、一切成就(いっさいじゆう)の祓詞(はらいことば)を、千度万度(せんどもんど)、つまり、一千回、一万回読誦(どくしよう)され、その際の数取(かずとり)のための麻(あさ)を函(はこ)に納(おさ)めたものです。 その「お祓い様」を入れてある箱を「御祓箱(おはらいばこ)」といいました。 転じて、「祓い」に「払い」をかけて、不用品を取り捨てることを「御払箱」と呼ぶようになったのです。 まさしく、私の書斎の「すつきり」も、「御払箱」のたまものでもあります。 御師が、全国に配った「お祓い様」が、現在の「神宮大麻(じんぐうたいま)の原型(げんけい)です。 その信者さんは、その「おはらい様」を「大神宮棚(だいじんぐうたな)」とよばれるところに大切にお供

えをしました。さらに、この御師と信者さんとの「師壇関係(しだんかんけい)」は、全国展開となり、江戸時代末期の全国の神棚奉斎(ほうさい)家庭は、なんと、九割だったといえますから驚きです。江戸時代の天皇陛下であらせられた第百十九代光格天皇様は、御製(ぎよせい)に、

「神様の 国に生まれて 神様の

道がいやなら 外国(とつくに)へゆけ」

と詠(よ)まれています。私共からすると、胸の痞(つか)えが下(お)りるような、心地のよい御製ではありませんが、少(ち)と過激(かげき)でもありません。しかしながら、時代背景等を鑑(かんが)みますと、さもありませんという御製のように思われます。

◇古事記(こじき)には、伊邪那岐大神(いざなぎのおおかみ)が、禊(みそぎ)をされ、左の眼(まなこ)をそがれました時に、お生まれになられたのが、伊勢の神宮の内宮(ないくう)に鎮座(ちんざ)されている天照大御神(あまてらすおおみかみ)とされている。伊邪那岐大神は、その天照大御神に統治者(とうじしや)としての証(あかし)として、「御頸珠(みくびたま)」を授(さず)けられました。「御頸珠」とは、今風に申し上げますならば、「首飾り」であります。お受け取りになった天照大御

神は、「御倉板拳之神(みくらたなのかみ)」に大切に保管されました。御倉というのは、住居とは別の清浄な建物のごとで、しかもその清浄な建物の中の神聖(しんせい)な棚、その棚の場所そのものが神様であります。そこに保管なさったのです。「大神宮棚」が、神棚の起源と記述しましたが、その根本(こんぽん)にある、よりどころといえるのは、この「御倉板拳之神」ではないでしょうか。大切なものを家の一番神聖な場所におまつりをする、この天照大御神の大御心(おみごころ)に神習(かみなら)うことこそ、敬神生活の基本である神棚奉斎といえるのではないのでしょうか。そして、神棚にまつべき神宮大麻は、日本人の大祖先神(おおみおやがみ)でもあり、総氏神(そうじがみ)である天照大御神が、常に国民とともにいらつしやるという「みしるし」、「おしるし」であります。さらに、「お祓い様」という、一切を祓い清める祓の道具、「祓(はら)い串(くし)」をも表象(ひょうじょう)している、表(あらわ)しているのではありません。その敬神の大御心は、歴代の天皇陛下にも脈々(みやくみやく)と受け継がれています。

とくに、第八十四代順徳天皇(じゅんとくてんのう)様は、「旦暮(たんぼ)敬神の勸慮(えいりよ)懈怠(けたい)なし」、「朝夕に敬神

の心をゆるがせにすることはない」とおっしゃっているのではありません。そのように、神棚奉斎、神宮大麻の奉斎は、天照大御神の敬神崇祖の思いに立ち返る、「もとほる」ということ、さらに、順徳天皇、光格天皇をはじめとして、歴代の天皇陛下の大御心に、「つながる」のです。「もとほり、つながる」営みが、神棚奉斎であります。今年一年、「お払い箱」にしたいたいものもおありでしょうが、新しいお札、神宮大麻を奉斎し、身も心も晴々と、清らかな心と体に「もとほり」、来年も、幸せへと「つながる」営みでありますようにお祈り申し上げます。

◇十一月の祭典行事報告

▼明治祭 *十一月三日



▼新嘗祭 *十一月二十三日

